

**P-194** 肺癌脳転移例の検討

浜松医科大学第一外科<sup>1</sup>、同放射線科<sup>2</sup>

○豊田 太<sup>1</sup>、鈴木一也<sup>1</sup>、野木村宏<sup>1</sup>、小林 亮<sup>1</sup>、  
原田幸雄<sup>1</sup>、西村哲夫<sup>2</sup>、金子昌生<sup>2</sup>

目的：肺癌の診療において、脳転移は頻度も高く、その治療は、予後及びquality of lifeの面から重要である。我々が経験した脳転移症例を臨床的に検討した。

対象：当科で経験した原発性肺癌の脳転移症例61例を対象とした。肺癌の組織型は、扁平上皮癌9例、腺癌32例、大細胞癌8例、小細胞癌10例、その他2例であった。原発巣の手術が施行されたのは30例、そのうち脳転移巣の切除も行われたのは15例であった。脳転移巣のみ手術が行われたのは13例、いずれも手術が施行されず、保存的治療が行われたのは17例であった。

結果：原発巣、脳転移巣ともに手術を施行した群の1年、2年生存率は40.9%、3年生存率は10.2%であったが、脳転移後非手術例に1年生存はなかった。また腺癌以外は全例が1年以内に死亡しているのに対し、腺癌の脳転移切除例では2年生存率41.9%を得ており、良好な結果であった。約半数に放射線治療が施行され、また最近ではガンマーナイフによる治療を経験し、未治療群より予後は良好であった。

結語：脳転移を来した肺癌症例において、長期予後が期待できるのは、積極的治療が行い得る症例であると考えられる。

**P-195** ウベニメクス投与肺癌症例における

免疫パラーターの変動と補体活性化作用の解析  
京都府立与謝の海病院呼吸器科<sup>1</sup>、京都府立医科大学第1内科<sup>2</sup>、京都パスツール研究所<sup>3</sup>

○小野寺秀記<sup>1,2</sup>、笠松美宏<sup>1,2</sup>、竹村周平<sup>2</sup>、  
近藤元治<sup>2</sup>、宇野賀津子<sup>3</sup>、岸田綱太郎<sup>3</sup>

目的：肺癌化学療法に併用されたウベニメクスの免疫調節作用を検討するため、末梢血の免疫パラーターの経時的測定を行なった。

対象と方法：肺癌14症例(男9症例、女5症例、平均67.8±7.4歳)を対象とし、リンパ球幼若化反応、T、B細胞、FcR陽性細胞比率、リンパ球サブセット(CD4, CD8, HLA-DR)およびリンパ球、単球、顆粒球のCD11, HLA-DR陽性細胞比率を検討した。また液性免疫パラーターとして免疫グロブリンや補体パラーターの測定を加えた。

結果：ウベニメクス投与により変動を認められたパラーターは、リンパ球に関してはConAによるリンパ球幼若化反応の増強、T細胞比率の減少、FcR陽性細胞やCD11陽性細胞比率の増加であった。追加検討した液性免疫パラーターではC3の増加など補体系の活性化が認められた。またこうした補体活性化因子としてINF- $\alpha$ 産生能がウベニメクス投与により増強されたと推定された。

結論：本研究から推測されるウベニメクスの免疫賦活作用は、細胞性免疫能、液性免疫能双方の増強であり、更に補体学的検討を加えて発表する予定である。

**P-196** 肺癌術後療法としてのCDDPを中心とした chemotherapy および chemo-radiotherapy vs.

FT207+OK-432の無作為化比較試験(第1報)

東北大学抗酸菌病研究所外科、仙台厚生病院<sup>1</sup>

○佐川元保、斎藤泰紀、近藤丘、谷田達男、小林俊介、  
遠藤千顕、薄田勝男、高橋里美、菅間敬治、  
佐藤雅美、永元則義、岡庭群二<sup>1</sup>、仲田祐<sup>1</sup>、藤村重文

CDDP、VDS、放射線治療を中心としたRegimenを適用したintensiveな治療が、FT207などの軽い治療に比して予後を改善するかどうかを検討するために、当科ではrandomized trialを施行中である。trialの開始から約2年が経過したため、現在の時点でのentryの状況を分析した。

1990年4月から1991年12月までに当科において原発性肺癌により治癒切除が行われた、74歳以下のpT2N0M0、pStage II, IIIAの扁平上皮癌、腺癌、大細胞癌例のうち、著しい合併症のないものをentryの条件とした。術前治療例、5年以内の他の悪性腫瘍の既往例は除外した。割付はブロックランダム法にて行い、層別因子は病期および組織型とした。治療のarmは、armAが $^5\text{CDDP}80\text{mg/m}^2 \times 2 + \text{VDS}3\text{mg/m}^2 \times 4 + \text{FT207}(\text{p.o.}) + \text{OK-432}$  (扁平上皮癌のpN1, pN2例に対しては $\text{CDDP}60\text{mg/m}^2 \times 2 + \text{縦隔照射}40\text{-}50\text{Gy} + \text{OK-432}$ )、armBが $^5\text{FT207}(\text{p.o.}) + \text{OK-432}$ とした。

上述の期間中開胸した原発性肺癌例は266例、うち56例がこのtrialにentryされた。放射線を組み合わせた術後化学療法のrandomized trialの報告はほとんどないが、本Regimenは施行に際して大きな問題がなく、追試も可能と考えられた。副作用やcomplianceもあわせて報告する。

**P-197** 術前動注療法の可能性の検討

防衛医科大学学校第2外科

○増田秀雄、尾形利郎、高木啓吾

Ⅲ期肺癌に対する手術単独治療成績は5年生存率にして10%前後であり、補助療法の確立が急務である。現在のところ手術のinduction therapyとしての全身化学療法の見込は5年生存率にして15%程度であり、必ずしも明るい展望を示しているとはいえない。

そこで今回は自験例における術前気管支動注療法のN2長期生存例を呈示しつつ、特にシスプラチン動注後肺腫瘍組織内濃度の検討結果が全身化学療法後の結果よりも有意に良好であることから、術前動注療法が有用な導入治療であることを示し、現在の実施プロトコールとその結果について報告する。